

TorajaEx.04

2014.9.3~2014.9.11

CONTENTS

● 団長挨拶	3
● 開催目的・Ex. 概要	4
○ 勉強会	6
● 日別報告	12
● 持ち物リスト	29
○ 改善点	30
● フリーエッセイ	32
● 編集後記	47

団長挨拶

スラウェシ島の大学生と交流し、桃源郷と呼ばれる Tanah Toraja にて日本とは違う死生観について学ぶ、これがトラジャ Ex. の大まかな概要です。

葬式に参列させて頂いた時、様々なことを考えさせられましたが、特にこの葬式が伝統的に現在にも引き継がれていることが印象に残りました。

2011 年、私が 2 回生の頃に発足されたトラジャ Ex. は今年でもう 4 回目になります。

4 回目を迎えた今年のトラジャは今までとは違うトラジャになりました。

初期のトラジャ人は日本人に人見知りをしていたそうですが、今ではとても社交的です。

また、Ex. 部長以外の I. S. A. 会員の団長、海外経験が豊富な方が例年参加しているトラジャ Ex. ですが、今年は初海外の参加者が多くいました。

変わりつつあるものの、この Ex. がトラジャの伝統のように語り継がれ、長く続いて欲しいと切に思います。

私の味気ない挨拶よりも参加者の方の文の方が面白いと思いますので、これにて私の挨拶の意とさせていただきます。最後まで読んで頂きありがとうございます。



2014 年 9 月 21 日 団長 二宮奨

開催目的

ISA、インドネシアスラウェシ島トラジャ県のサダン村、ハサヌディン大学学生、カルチャー・ツアー専門旅行社カンブン・エクスペディションズとの共同企画。独特な伝統文化が色濃く息づくトラジャ地域で生活する人々と共に、学生交流、異文化交流を深めるのが本プログラムの開催目的です。

Ex. 概要

★参加者一覧（計 16 名）

役職	氏名	支部	大学	学年
団長	二宮 奨	神戸	甲南	5
副団長	岡村 拓	神戸	関西学院	4
	小澤 一生	神戸	関西学院	3
財務	林 愛恵	神戸	関西学院	3
文化紹介	矢頭 裕典	大阪	関西	2
	小西 達也	神戸	関西学院	1
	長野 さくら	九州	北九州市立	1
	中村 安依子	神戸	関西学院	1
勉強会	田中 香奈	神戸	甲南	2
	有賀 大輔	神戸	甲南	1
報告書	早川 友美	京都	同志社女子	3
	伊藤 有希	神戸	甲南	2
国際渉外	小川 理紗	神戸	関西学院	3
チケット	戸川 笑利	九州	北九州市立	2
SNS	渡辺 宗太	神戸	甲南	2
薬	市口 尚義	大阪	関西学院	2

★協力団体

カンブンエクスペディションズ/ハサヌディン大学日本語学科の皆様

★プログラム日程

* Day0

クアラルンプール空港集合≫マカッサル!!GrandWisataHotel 泊

- ・マカッサルの空港でマルセルさん、バルバラさん、モネさんに迎えられバス移動
- ・夕食はハサヌディン大学の生徒さんとレストランでインドネシア飯
- ・ホテルにて文化紹介で披露するダンスの練習

* Day1 **トラジャ Ex. 04 スタート！！**

ハサヌディン大学の学生と交流≫GrandWisataHotel 泊

- ・日本人の先生からの挨拶/自己紹介/ゲーム/キャンパスツアー/文化紹介 etc.
- ・昼食はキャンパスツアー中に学食で
- ・文化紹介は折り紙、紙風船、竹とんぼ、羽子板で遊び、最後にみんなで「恋するフォーチュンクッキー」を踊りました。
- ・夕食はレストランで

* Day2

ハサヌディン大学の学生と交流≫GrandWisataHotel 泊

- ・ソンバオブ要塞/ロテルダム要塞/買い物/マカッサルの夕陽 etc.
- ・昼食は「チョトマカッサル」
- ・夕食はレストランで

* Day3

マカッサル発≫トラジャ!!トンコナン泊

- ・10 時間に及ぶバス移動の日
- ・昼食は Parepare のシーフードレストランにて
- ・昼食から数時間後 Lakawang Hill にて休憩

* Day4

市場≫お墓訪問≫孤児院訪問≫トンコナン泊

- ・孤児院で「心の友」合唱

* Day5

土産屋≫サダン村のホストファミリーや子どもたちとの交流≫トンコナン泊

- ・要するにフリーな1日
- ・洗濯、水浴び

* Day6

お葬式参列≫豚の解体見学≫コーヒー事務所訪問≫BoluMarket ぶらり≫トンコナン泊

- ・豚の解体見学後、レストランにて豚料理
- ・BoluMarket にてフェアウェルパーティーで振舞う肉じゃがの材料を購入

* Day7

小学校訪問≫土産屋≫パーティー準備≫パーティー≫トンコナン泊

- ・小学校では Day1 で使った折り紙や紙風船なども使って子どもたちと交流

* Day8 最終日

トラジャ発≫マカッサル!!GrandWisataHotel 泊

- ・昼食は Parepare のシーフードレストランにて
- ・昼食から数時間後 LakawangHill にて休憩
- ・夕食は KeyCoffee 系列のレストラン
- ・ホテルで解散し Ex. 終了

勉強会

★タイムテーブル

- 14 : 00 集合、文化紹介のダンス（AKB48 の恋するフォーチュンクッキー）練習
- 16 : 00 発表① プレゼン
- 18 : 00 ご飯、お風呂 自由時間
- 21 : 15 発表② 思い考え
- トラジャ Ex. でのそれぞれの目標、やりたいこと
- 21 : 50 その他、役職連絡
- 22 : 15 「心の友」（五輪真弓）をきく



★発表内容～スライド集&会話帳～

インドネシアのパンクについて



インドネシアはアジアでパンクが最も栄えている国だと言われています



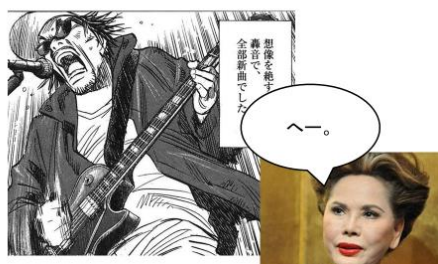
何故こんなにも人気なのでしょう？



パンクが若者の民主化運動を訴えるツールとなったからです。



歌でメッセージを主張するのにパンクがベストだった。



インドネシアの独立運動(1945)、
1974~1978のスクルノ政権の際に使われました。



現在もインドネシア政府では汚職が多いものの、政治は昔より安定してきているため、パンクの需要は減ってきている。



このノリを今も引き継いでいるのが
MARJINALというパンクバンド
(youtubeで聞けるので良かったら聞いて)



7月に行われた選挙で市民派から当選したジョコ・ウィドド氏は市民派と呼ばれており、汚職は減るかも？(バンク運動にいらなくなる？)



おわり

ちなみにデヴィ夫人とはスカルノ元大統領第3夫人のことなのよ。



喫煙大国

インドネシア

小澤一生

1位(前年2位):ハルトノ兄弟(ジャルムグループ)\$15.5 billion
 2位(前年1位):エカ・チプタ・ウィジャヤ(シナールマスグループ)\$13.1 billion
 3位(前年3位):アンソニー・サリム(サリムグループ)\$10.1 billion
 4位(前年5位):スシロ・ウォノウィジョヨ(グダングラム)\$6.0 billion
 5位(前年6位):マルトゥア・シトルス(ウィルマー・インターナショナル)\$3.7 billion
 6位(前年7位):アブリザル・バクリー(バクリーグループ)\$2.45 billion
 7位(前年8位):ブトラ・サンブルナ(サンブルナ・ストラテジック)\$2.40 billion
 8位(前年10位):ピーター・ソンダク(ラジャワリグループ)\$2.3 billion
 9位(前年14位):モホタル・リアディ(リッポーグループ)\$2.1 billion
 10位(前年7位):スカント・タト(ロイヤルゴールデンイーグル)\$2.1 billion



なぜタバコ産業がこれほど大規模か？

問題点

- 早死
- 医療費増
- 貧困助長



かつてのアルディくん。※画像はYouTubeより

時代の流れは・・・

・バリ島知事の勇敢

・禁煙法

救世主となるか・・・

それとも
ザルか・・・・・・・・・・

インドネシアの宗教

キリスト教

- ・インドネシアでほとんどがイスラム教なため、キリスト教は少数派になっている。
- ・しかしインドネシアは憲法で信仰の自由があるので全然OK
- ・ただ無神論を公言するのは違反につながる
- ・キリスト教が多い地域はスラウェシ島北部、東部諸島およびニューギニア島西部がイスラム教より多い
- ・キリスト教はおもてなしの精神が強い(これは僕が3月でいったフィリピンでもそうだったため、確信有！)

葬式儀礼

早川友美・伊藤有希

祖霊崇拝

なにそれ？

「故人が神となって私たちを見守ってくれる」と信仰すること。



葬式の見学

「不謹慎！！」と、思いませんでしたか？
葬式は人生のハイライトなのであります。

「もはや宣伝している・・・！」
見学するときは、タバコを献上しましょう。



“殯”

何と読むでしょう。



“殯”とは

- 死者が死後しばらくの間“病人”として扱われる
- 西側に一定期間遺体を安置
- 死者も家族もしばらくは西枕で眠る
- 死者の復活を願う



“殯”の期間、家族は

- 家畜である水牛、豚を死者の死に対する犠牲として殺すために準備をする
- 真心をもって死者に仕える



トラジャ族にとっての“方角”とは

- 西側：死者が生前に起居した場所
- 南側：祖先たちの居る冥界のある方向
→ 死者が冥界に赴きやすいようにするため



これって・・・

日本の“お通夜”に
似てくれない？



調べてみました、日本の“殯”

- 日本にも古代、“殯”の風習があった
- 日本での“殯”の意味は別れを惜しみ、死者の靈魂を畏れ、かつ慰め、死者の復活を願いつつも遺体の腐敗・白骨化などの物理的変化を確認することにより、死者の最終的な「死」を確認する
- 現在は“通夜”として残っているという説もある！！



もがりから数か月...

お金を貯めた遺族たちは、盛大に故人を葬儀場へ。



哀悼の歌

男性たちが輪になり、時計回りで歌います。



クライマックス



それでは、トラジャのお葬式を盛大に祝いましょう!

インドネシア語会話帳

勉強会で調べたインドネシア語をまとめました。

カタコトでもいいので話してみよう！ 現地の人とより親密になるかも…?!

* あいさつ

- Selamat pagi (スラマッ・パギ) おはようございます
- Selamat siang (スラマッ・シアン) こんにちは(昼 12:00~16:00)
- Selamat sore (スラマッ・ソレ) こんにちは(夕方 16:00~18:00)
- Selamat malam (スラマッ・マラム)こんばんは

- Apa kabar? (アパ・カバル) お元気ですか?
- 初対面: baik-baik saja(バイッ・バイッ・ッサジャ) お元気です
親しい友人: Biasa saja(ビアサ・サジャ) お元気です

- Saya merasa senang sekali (サヤ・ムラサ・スナン・カナリ) とても楽しかったです
- Saya senang bertemu dengan Anda (サヤ・スナン・ブルトゥム・ドゥンガヌ・アンダ)
お会いできてうれしかったです
- Sampai bertemu lagi (サンパイ・ブルトゥム・ラギ) またお会いしましょう
- Sampai jumpa(サンパイ・ジュンパ) さようなら

* 自己紹介

- Perkenalkan. (プルクナルカヌ) はじめまして
- Nama saya~ (ナマ・サヤ~) 私の名前は~です
- Nama Anda siapa? (ナマ・アンダ・スィアパ?) あなたの名前は?
- Saya dari Jepang. (サヤ・ダリ・ジュパン) 私は日本から来ました。
- Anda berasal dari mana? (アンダ・ブルアサル・ダリ・マナ) どこから来ましたか?

*知っておくと便利なことば

- Terima kasih (トゥリマ・カシ) ありがとう
- Sama-Sama (サマ・サマ) どういたしまして
- Maaf (マアフ) ごめんなさい
- Permissi (プルミシ) すみません *Excuse me の意味
- Apa Ini Itu (アパ・イニ・イトゥ) あれは何ですか? *Itu(イトゥ) あれ
- Di mana WC? (ディ・マナ・ウェーセー?) お手洗いはどこですか?
- Tolong! (トロン!) 助けて!
- Saya tersesat. (サヤ・トゥルスサツ) 道に迷いました
- Gembira (グンビラ) うれしい Senang (スナン) 楽しい
Takut (タクッ) 怖い Suka (スカ) 好き

*お買い物

- Ada~ (アダ~) ~はありますか?

air (アイル) 水

- Saya perlu~ (サヤ・プルル~) ~をください
- Berapa harganya? (ブラパ・ハルガニャ) いくらですか?
- Lho kok mahal. (ロ・コッ・マハル) 高すぎます

日別報告書

BEFORE

8/22-9/2

ホーチミンシティ~シェムリアップ~バンコク~クアラルンプール

インドネシア・トラジャ Ex. に先立ち、8月22日から単身、東南アジアに入った。就職活動により自分の欲求を激しく抑圧されていた頃から、夏には全て終わらせて東南アジアをバックバックしようと固く心に決めていた。その夢を実現するため、12日間という異様に長いビフォアとなった。

東南アジアの旅は、思った以上に肉体的、精神的にタフさの求められるものであった。海外にいるという緊張感、衣食住に伴う値段交渉、無駄にエネルギーを消費する人々、バイクで洪水のようになった道路横断、下品な日本語で付きまとうトゥクトゥクドライバー、陸路での国境越え、クレジットカード喪失、勝手にガイドを始める輩たち、かと思えば、積極的に別の寺院に案内しようとする自称大学生などなど。ここには書けない体験もあった。

そのような盛りだくさんのビフォアから、少しでも読者に有意義になるような体験談を1つ紹介したい。勝手にガイドする輩の話である。ただし、あくまで自己満足な体験記であることをつけ加えておこう。。。!

アンコールワット遺跡群での話。遺跡には、至る所にガイドを始める輩が潜伏している。彼らは目のぎらぎらした怪しい大人とは限らない。いたいけな子供たちもやはり、観光客を見つけると気さくに話しかけてきて、コンニチハ！に対してコンニチハ！と返せば、そこからガイドは始まっていくのである。私はこのトラップに1度引っかかった。正確に言えば、あえて引っかかってみた（強がりではない、断じて！）。

アンコールワットの敷地に入ると、程なくして胡散臭い男が片言の日本語と少しこなれた英語で声をかけてきた。年は30～40の間くらいか。彼は、自称僧侶学校の学生兼コックだと言う。そして、唐突にガイドは始まった。「コッチ、コッチ、ミテ！」この手の商売は初見であったが、明らかに怪しい。しかし、「契約してないからお金の話が出たら断って逃げてしまえばいい」そう思って、そのまま勝手なガイドに身を任せた。ガイドはかなり詳しく、信ぴょう性も高かった（後日裏づけを取った）。そして、何よりも撮影スポットと撮影技術を心得ていた。一人旅にとってこれほどうれしいことはない。自分の写真が好きなだけ撮れる！敷地内に仏教の学校があるとのことなので、検証の意味も込めて、そのガイドもお願いした。すると、すんなり学校の敷地を案内してくれ、いよいよ真実味は増した。学校の見学も終わり、「さて、いよいよアンコールワットの本陣（3本のつくしみみたいなヤツ）か」と思いきや、ごはんの時間だから行けないという。だいたい私は彼のガイドに気をよくしていたので、サンキュ~の意味を込めて写真を1枚撮った（照れ笑いした彼の顔はいまだに私のPCに眠っている）。それでサヨナラできれば良かったのだが、案の定、金を要求された。それも30ドル！僧侶学校は孤児院も兼ねているが、運営には寄付金が必要らしい。そこから10分ほど口論になった。結局のところ、私が折れて11ドルも払わされた。約30分のガイドで11ドル。ちなみに、カンボジアの平均月収が約30ドルとのことなので、きっとこのガイドはカンボジアの長者ランキングに載っているでしょうね！

岡村 拓

9/1

KLIA2→クアラルンプール→マラッカ

8月31日の夜にクアラルンプール国際空港第二ターミナル(KLIA2)に到着した。宿代節約のため空港泊をした。KLIA2には寝ころべるスペースがいくつかあり、そこで寝ることにした。早朝便で空港に来た人たちの話し声と足音で起き、KLIA エクスプレスでクアラルンプール市内のKL セントラル駅に向かった。所要時間は約30分で値段は約1200円と少々高いが、乗客が少なく快適であった。空港の周辺は何もないただの草地であったが、クアラルンプール市内中心地に近づくにつれ、高層ビルがちらほら見えはじめた。

KL セントラル駅にはシャワールーム(約150円)と荷物預かり所(大きい荷物で1日150円)があり、それらを利用した。シャワールームのお湯は出なかった。フィリピンEx.の水シャワーを懐かしく思いながら体を洗った。マスジット・ジャメ(クアラルンプール市内最古のイスラム寺院)を目指し電車(LRT)に乗った。電車は約8分間隔で運行しており、電車賃は約

35～100 円と非常に安い。寺院は最寄駅のマスジット・ジャメ駅のすぐ目の前にあるのだが、地図を読み間違え探すのに苦労した。イスラムの寺院なので女性は肌の露出は厳禁でチャドル(体全体を覆う布。頭からかぶり前を閉める)を借りて着た。マスジット・ジャメは大理石の床や柱廊が非常にきれいであった。マレーシアにある寺院のなかで一、二を争うほどの美しさと言われるだけある。マスジット・ジャメを後にし、チャイナタウンに向かった。チャイナタウンには関帝廟(関羽を祀る廟)がある。横浜や神戸にもあるが、私は中国史を専攻しているのでやはり外国の関帝廟を一目見るべきであると思い訪れた。関帝廟のすぐ近くにスリ・マハ・マリアマン寺院(ヒンズー教寺院)がある。その寺院のゴプラム(塔門。極彩色の神の彫刻が施されている)を見て圧倒された。作りは精巧で非常にインパクトがあった。クアラルンプールで圧倒されたならば、インドのゴプラムを見たら腰を抜かすかもしれない(笑)

クアラルンプールを後にし、マラッカに向かった。マラッカには TBS バスステーションからバスで 2 時間、運賃は約 450 円。TBS バスステーションでバスの時間まで待った(5 時間待ちました…笑) マラッカ・セントラル・バスステーションからマラッカ市内の交通手段はバス(運賃約 35 円)またはタクシー(所要時間 30 分約 600 円)がある。私たちがマラッカに着いたときには終バスが終わっていたので、しぶしぶタクシーでマラッカ市内にあるホテルに向かい、チェックインし就寝。

クアラルンプールはチャイナタウンの中にヒンズー教の寺院があつたりとなかなかカオスであった。ツインタワーやショッピングモールや高層ビルが建ち並ぶ近代都市である一方、モスクや寺院、市場や公園などが混在する非常に興味深い街であった。



林 愛恵

9/2

わたくし小澤、マレーシアはマラッカにいました。マラッカとはどういったところか。クアラルンプールから南東にバスで 2 時間。1400 年にマラッカ王国ができてからヨーロッパ諸国に支配され、ヨーロッパ文化とマレー文化が独特に融合されている。世界遺産にも登録。

とりあえずマラカをぐるっとまわってみた。(そんなにでかい街ではないのだ) まず、チャイナタウン。マレーは多民族国家だからいろんな人種のまちがある。チャイナタウンは前日クアラルンプールでも見たので、さっと見て回る。中国のお寺にはいったとき、お線香がミロの緑カップに入っていたのは笑った。寒冬の味方ココアの。どうやらマレーシアではミロ

が大人気らしい。あちこちのお店でミロののれんがかかっている。

ずっと進むと、インド人街。ガネーシャが描かれた大きなアーケードが出迎えてくれたぞ！と思いきや、足を数十歩すすめたら終わってしまった。ちっちゃ！！

すこし傷心気味であるく、すると目の前に、赤と青の色鮮やかなマレーシアの国旗が大量になびかされている、オシャレな運河があらわれた！美しかった。アジアの喧騒を一気に消し去った。さらに行くと左には赤茶ピンク色？のオランダ教会、右にはザビエル像のセントフランシスザビエル教会が見られる。このオランダ広場の中心にある小高い丘には中世に要塞としていたサンチャゴ砦がある。まわりのヨーロッパ調とお似合いのサンゴ造り。ここで小1時間くらいゆっくりしてたかな。

アジアとヨーロッパ。街の景色が全然違う。ヨーロッパは家や教会などの建築に統一性をもたせ綺麗に整っている。一方、アジアは近年の急な経済成長のためか風情の残る伝統家屋の一角に突然コンクリート造りの高層ビルや巨大なショッピングモールが現れる。工事現場も多かった。あと、気づいたのがマラカはほとんどの道が一方通行だということ。交通の流れが鈍く、やけに車が渋滞していた。活気があるのはいいけれど、文化や伝統と経済発展の境界線がないのはちょっと違うなと思った。

ともあれ、かれこれ空港泊したり、でかい荷物を持ての移動移動移動であったり、初の東南アジアということでアジアの熱気に押し倒されていたこともあり、このタイミングでマラカという半分ヨーロッパ的なところすこしゆっくりできたのは個人的によかった。

次の日からのトラジャ Ex. へと心身ともに切り替えだ！

小澤 一生

Ex. START !

9/3

この日はクアラルンプールのカプセルホテルにて起床。クアラルンプール国際空港のスタバにて朝食をとった。スタバはどこの国でも高い。そのあとメンバー全員と合流し、マカッサル行きの飛行機に乗った。エアアジアは本当に狭くてしんどかった。17 時くらいにマカッサルに着いた。空港をでると、外には日本とは全く違う景色が流れ込んできて、これから 10 日間が楽しみで仕方なくなった。すると、I. S. A. の看板を掲げた人たちが私たちを迎えに来てくれた。マルセルさんとバルバラさんだ。日本語がすごく上手であっけにとられた。Ex というのは使い慣れてない英語を使い、いかに現地の人としゃべりぬいていくかというものだと思っていたが、



日本語があまりにもうまいのでそんな楽しみが無かったので少し寂しい感じもした。そのあとバスに乗り、ホテルに直行した。バスの中は閑空に行くリムジンバス並に快適だった。マルセルさんのマルセルジョーク等も炸裂でバスの中では退屈しなかった。ホテルについてすぐに夜ごはんを食べにレストランへ向かった。店の中には1羽丸丸の鶏が吊るしてあって面白かった。夜ごはんは鍋料理みたいなやつと野菜たっぷりの何かと魚のやつとチキンのやつがあった。どれもおいしかった。私のテーブルに一人インドネシア人が座ってくれた。アルディンというダンスと日本語が上手な男だ。あまりに日本語が上手だったので、私は嬉しくてまるで尋問しているかのような質問の量をアルディンにぶつけたが、少しだけ困っていて申し訳ない気持ちが出た。私は彼がダンスができるといったので「ムーンウォークをやって」と無茶ぶりをしたが、普通に対応してくれてしかも上手だった。このインドネシア人を見て私は明日からの大学生の交流が楽しみで仕方なくなった。ご飯を食べ終え、ホテルに戻り就寝した。

渡邊 宗太

9/4

起床→ハサヌディン大学に移動→ハサヌディン大学の生徒の文化紹介→大学構内の案内→日本人からの文化紹介→夕食→就寝

朝早くに起床し朝食後ハサヌディン大学に向かいました。大学に向かうまでに昨日の夜みたマカッサルの街並みとは違うマカッサルを楽しみながら大学に着きました。大学は広く自然豊かで落ち着く空間でした。案内されたのは風が吹き抜ける白いタイルの敷かれた場所で前方に湖を臨むことができ、ハ



サヌディン大学の学生が温かく迎えてくれました。初めは自己紹介から始まり向こうの学生は日本語で自己紹介を私たち日本人はインドネシア語と日本語を両方使った自己紹介をしました。そしてハサヌディン大学の学生の方からの文化紹介が始まり交流がスタートしました。まずインドネシアでの伝統的な踊りを3人の女子生徒が披露してくれました。次に考えてくれていたのはリレー形式のゲームでした。パンではなかったのですがインドネシアで売っているお菓子をパン食い競争の要領で吊るしそれを食べきった後腰に巻いた紐に結わえつけた鉛筆をペットボトルの飲み口にいれてゴールというものでした。それをチーム2つに分けて遊びました。そのあとは大学内を案内してもらい散策しました。グル

ープが5つぐらいに分けられそれぞれ案内してもらいました。私たちのグループが初めて行ったところは鹿がいる場所でした。柵で覆われたスペースに鹿が飼われていました。その後ペテペテという日本でいうタクシーみたいな乗り物に乗せてもらい場所を移動しました。移動中は終始会話が弾みました。日本文学を専攻している学生たちばかりなので日本語が上手で驚きました。医学部や文学部など多くの学部の校舎を回って食堂で昼食を食べました。私たちはナシゴレンを注文しハサヌディン大学の学生たちはジュースを注文して美味しくいただきました。そのあと先ほどの湖の見える場所に移動し私たち日本人からの文化紹介をしました。やった内容としては折り紙、紙風船、羽子板、竹とんぼでそれぞれグループに分けてやったのですが思いの外楽しんでくれたようでもはやグループなど関係なく遊んでいたように思います。そして大学の学生が自撮りをはじめみんなを巻き込みその勢いで恋するフォーチュンクッキーを向こうの大学生も巻き込んで一緒に踊りました。当初の予定通りとは行きませんでしたがとても楽しい交流になりました。そのあとは1時間ほど留まりおしゃべりしたり写真を撮ったりして楽しみました。ホテルに戻ってからはレストランに行き夕食を食べた後就寝しました。

中村 安衣子

9/5

今日は、ハサヌディン大学の学生とバスに乗って博物館に行きました。博物館に行くと班に分かれてハサヌディン大学の学生（班は、ベント君と花ちゃんとアヤちゃんとザールとリアちゃんでした）にいろいろ紹介してもらいました。ベント君が流暢な日本語で本当にわかりやすかったです。ゴア王国の物や伝統的な衣装や結婚式の衣装やイスラム関係の物などいろいろありました。僕的に印象に残ったものは、衣装に血がついていた物（ベント君曰く、死んだ人から剥ぎ取った物らしい）や離婚した人の服装の色が違うこと（イスラム教だから離婚に厳しいのかな）でした。そして見終わったらみんなで話したり、写真とったりして暇をつぶして（こういう暇が結構楽しかったりする）、お昼ご飯にマカッサルで人気のチョトマカッサルを食べました。結構おいしかった。次に要塞に行っていていろいろ見てから、インドネシアのゲーム（けんけんパーみたいなゲーム）をして遊びました。これが見た目よりも難しかった。けど楽しかった。次に班に分かれて買い物！ここで鞆を前にするように言われる……。僕それで警戒＋緊張（笑）ぶらぶらしながら買い物をしました。ここで屋台に売っていたバロンチョン（ホットケーキミタな食べ物）に僕ハマりました！バロンチョンうまい！！ここから、プッシュバナナを求めて屋台がいっぱい並んでいる所いき、プッシュバナナを食べました。個人的には、甘すぎました。けど、夕日の下でみんなで食べたプッシュバナナは最高の味でした。ここで1日目に仲良くなったニラちゃんが、砂浜にアリ（僕の名前）ハ

ートと書いてくれて「アリさんこっちきて～」って言われて満面も笑みで行く僕（笑）自分の漢字を書いたり、いたずらしたり楽しかったです。でも海はすごく汚かったです（笑）その汚い海の中に子供たちがバンバン飛び込んでいたので驚きました。もう一つ驚いたのは、僕たちが食べ終わって店員さんがプッシュバナナを掃除していた時、ゴミをバンバン海に投げ捨てていたので驚きました。う～ん、これも文化の違いなのかと考えさせられました。そしてとうとう来てしまったお別れの時＜ハサヌディン大学の学生が僕たちのためにプレゼントを買ってくれていました。感動です。2日間という短い期間ですが、とても長く感じられ明日から会わないのがなんか変な感じがしてとても寂しい感じがして複雑でした。まさに一期一会ですね。また素敵な人ばかりのハサヌディン大学の学生と会いたいですね。ハサヌディン大学のみんなありがとうございました。

有賀 大輔

9/6

ハサヌディン大学の学生たちとの熱い 2 日間の名残が尽きないなか、とうとうトラジャへと出発する日がやってきました。私とエリさんは、遅刻常習犯なので、いつものようにキラキラ8時にロビーに集まりました。寝すぎて朝ごはんを食べる暇がなかったので、ホテルの朝食バイキングの目玉焼きを食パンにはさみ、勝手にテイクアウトしてバスに乗り込みました。みんなハサヌディン大学の学生たちとアクティブな2日間を過ごしていたので、レストランに着くまで爆睡でした。

昼食のレストランはEx. 期間中で一番おいしいレストランだったと思います。でもどこのレストランもたいてい赤いテーブルクロスがひかれていてほしい同じ料理が出てくるのであまり覚えてません。笑

おいしいナシゴレンを食べてお腹いっぱいになったあと、また数時間バスに揺られました。私とエリさんはバスの最後尾に座っていたのですが、最後尾は揺られるというかも跳ねます。ふだん車酔いをあまりしない私ですら吐きそうになりました。周りの人に助けを求めようとしたけどみんな爆睡という最悪の状況のとき、休憩所に到着し私の命は救われました。紅茶もコーヒーも飲めないほど気分が悪かったけど、おしゃれなお店の2階に上がって、美しい山々を見ているうちに体調は良くなりました。結局バルバラさんがくれたトラジャ菓子とかもぱりぱり食べました。トラジャのお菓子は甘すぎたり、油っぽかったり、あまり好みじゃないものもありましたが、日本でも食べたことのあるような、おいしいものもありました。バルバラさんがよくバスの中で配ってくれた日本のかりんとうみたいなお菓子は私の大ヒットでした。おみやげに何パックか買ったけど、帰国してから誘惑に勝てず1人で食べました。



またバスに乗り、辺りも真っ暗になって、ようやくサダン村に到着しました。出迎えてくれたのは元気いっぱいの村の子供たちと村長、そしてバナナの天ぷらでした。インドネシアに来てから、メープルシロップに浸された干からびたバナナ、バナナチップス、バナナの天ぷら、バリエーション豊かなバナナ菓子を食べてきました。もちろん生のバナナもいっぱい食べました。バナナの無限の可能性を知りました。

バナナの天ぷらを食べてからの晩ごはんを終えて、噂のトンコナンに潜入し、意外ときれいなトイレに感動したあと、トンコナン女子部屋で怒涛の千羽鶴づくりが始まりました…。



長野 さくら

9/7

【市場見学→ケテ・ケスにてトンコナン見学→孤児院訪問】

トラジャでの活動 1 日目。コーディネーターのマルセルさんとバルバラさんから今日の予定を聞いての第一声は「あ、今日体洗う時間ないんだ…」。

そんな思いを払拭しつつ市場に向かう。色とりどりの野菜や、コーヒー豆、魚が何の包装もなく置かれている。そんな中、味の素が売られていた。さすが世界の NIPPON、と自画自賛。

食材や雑貨類が売られている通りを過ぎると、水牛の市場を目にする。トラジャ民族にとって水牛は死人を天国に連れて行く大事な動物である。市場でもかなりの人々が水牛を一頭一頭念入り見ている。次に見たのが豚の市場だったが、水牛の市場よりもはるかに残酷に感じた。聞こえるのは、豚の悲鳴、悲鳴、悲鳴。板に固定された豚たちが最後の力を振り絞って悲鳴をあげている。私はなんだか申し訳ない気がしてきて、いたたまれなくなった。お葬式や Farewell party の時にも感じた、トラジャ民族の人々と生き物の死の近さをここでも確認することとなった。

昼食を食べてから、孤児院を訪問。サロンを巻いた院長さん指揮のもと、子どもたちの演奏が始まる。横笛と、実は金管楽器と同じ吹き方の竹の楽器での演奏。曲名も何もわからないけれど南国の屋下がりにはよく似合う音楽だった。この演奏の後にフランス人の観光客に対して同じ演奏をしていた。演奏中、つまらなそうな子どもがいるのは何回も同じことをしているからなのだな、と痛感。二度目の演奏が終わり、ようやく子どもたちと遊ぶ時間になる。日本人メンバーが持ってきていた竹とんぼや紙風船、羽子板で遊んだり、子どもたちに横笛や竹でできた金管楽器(?)の吹き方を教えてもらう。子どもたちが『日本語で名前を書いて!』というので書いてあげる。すごく不思議そうな顔でまじまじと見ている子どもたち。中には自分の彼氏の名前を書いて!とお願いする子も。(本人は照れ隠しで否定していたけれど周りの子が教えてくれた。)恋愛感情に国境はないんだな~いいな~と思いつつ書いてあげる。(笑) 他の場所では日本語教室ができて、そこで習った日本語を披露しに来てくれる。



あっとゆうまにお別れの時間になった。数時間しか一緒にいなかったとはいえ別れは寂しいな、と感じていると、けっこうあっさりしている子どもたち。やっぱり観光客慣れしているんだな。ただ、帰るときに「サヨナラ、リサ!」と日本語で声をかけてくれた子がたくさんいたのは嬉しかった。

たった数時間一緒にいるだけでは、その子たちの生い立ちとか、「孤児院」という場所の暗部とか、感じることはできなかったけど、純粋に楽しい!と思えた時間を共有できたことが幸せです。今日出会った人たちがいつかまたこの幸せな数時間を思い出してくれたらな~と思っています。みんな、Terima kasih!!

小川 理紗

9/8

まぶしい。目が覚めると、トンコナンの中はもう明るかった。トラジャで迎える2回目の朝。枕が変わると眠れない習性を持つ私は、いつ何時でも鳴き狂うニワトリたちに苦しめられ、ここでぐっすり眠ることはないだろうとあきらめていたのだが、この日は夜中に起きることもなく、日の光で自然に目が覚めるという理想的な朝を体感したのだった。

下に降りるとすでに朝食が並び、少し肌寒いトラジャの朝を彩っていた。数種類のおいしいおかずと炊き立てのご飯が湯気を立てている。その横に、申し訳程度に置かれたバナナ。しかし、その色は鮮やかで、まぶしい。日本を出てからというものの便秘に悩まされてい

たので、他のおいしそうなおかずよりも先にそのバナナを手にとった。皮を剥き、パクリ。あぁ、お腹に優しい味だ。そう思いながらもう一口。いや、待てよ。昨日もバナナを食べたな。また一口。おとといも食べたような。さらに一口。そもそもマカッサルでもさんざん食べたんじゃないか。食べる手を止め、バナナを見つめる。私というやつはEx.が始まってからというもの、ほぼ毎日バナナを食べているではないか。しかし、このバナナ生活、なんの役にも立っていない気がする。お前さん、いよいよ怪しいんじゃないか。私のお腹を重くしているだけじゃないのか。…本当は食物繊維が入ってるなんて、嘘なんじゃないの？

しょうもないことを考えながら朝食を終え、バス移動を終え、昼食も終えて、再びトンコナンへ戻ってきた。ここからは、フリータイム。「私、サロン買ってこようかなー」という先輩にすかさず便乗し、私もサロンを買いに行くことにした。男性陣が腰に巻いたり、肩からかけたりしている綺麗な布を、ひそかに欲していたのである。サダン村の一角に軒を連ねる小さな店たちの中は、どこもサロンで埋め尽くされていた。もう、迷う迷う。色で迷い、デザインで迷い、やっと候補を絞ったと思えば店の奥さんが「これもいかが？」と出してきた、また迷う。くうー。満面の笑顔が、憎いぜ。迷った挙句、最初に目を付けたものを購入。満足満足。タリマカシー。

サロンを巻き巻き、いよいよサダン村の子供たちとの交流だ。今日のメインイベント！とばかりに意気込んで外に出るも、村長ジュニアしか見当たらない。皆どこへ行った。元気なジュニアは男性陣とのボール遊びに夢中だった。ので、それを観察。ちびっこはかわいいなあ。元気だなあ。言葉が通じなくても遊べるって、素敵だなあ。

写真を撮っていると、何やら背後でもきゅっきゅとはしゃぐ声が聞こえる。何事か。振り向くと、そこにいたのはヤボン玉で遊ぶ小西達也君ことコニタンと、それを様々な角度から撮影する女子たちであった。啞然。しかし、シャボン玉をうまく作ることができない彼を眺めるのは面白く、私も撮影会に参戦することにしたのだった。スマホの画面に現れる、屈託のない笑顔。そのときふと思ったのは、彼は便秘とは無縁なのだろうということである。ゆるゆるとした、Ex. 中のとある一日の出来事。



伊藤 有希

9/9

朝から、お葬式を見に行った。トラジャ Ex. といえば、お葬式。わたしにとっては一番気になっていたものだ。お葬式の会場に入っていくと独特の雰囲気漂っていた。会場にいき、すぐに目に入ってきたものは、殺されて、すでに解体されていた水牛だ。水牛の角を得るために、頭蓋骨を斧でかち割っていた。見てしもうた…という感じだった。

トラジャのお葬式は日本のお葬式とは違う。いろいろ違う。会場には MC みたいな人が

いて、すごく派手に大声でナレーションをするので、どこぞのライブハウスだろうかと思った。亡くなった方の親戚の多さに驚いた。こんなにたくさんの人がお葬式に来るのかと思った。紐でつながれた水牛や竹と紐で縛られて横たわらされている豚がたくさんいた。死後、天国に行くための乗り物として生贄とされる水牛や豚の用意や、葬儀場をかざったりするために、トラジャ族は出稼ぎに行ってお金をためていると知って、いろいろ考えさせられた。お金がたまって立派な葬式を開くために、今回の人は亡くなってから4年をようしたようだ。豚が殺されて行く姿を見た。剣が刺され、抜かれた後血がドボドボ出てきていた。そして殺された後、大きなバーナーで丸焼きにされていた。黒い服を着た大人たちが円になって、手をつないで歌を歌っていた。私たちを含める外国人観光客は、それらの様子を、お菓子を食べたり、コーヒーや紅茶を飲んだりしながら見物し、カメラでパシャパシャ撮る。カラフルな葬儀用の衣装を着ていた人もいた。トラジャの一大イベント、セレモニーお葬式は、本当に興味深くて、おもしろかった。

そしてお葬式を見学した後、お墓に行った。お墓は、がけのなかにあって、洞窟に入っていた。洞窟の中には骸骨や、棺桶がとてもたくさんあった。日本で骸骨を見たら叫んでしまいそうだが、トラジャで見る骸骨は不思議と怖くない。

昼ご飯は、「トラジャ飯」だった。ゲテモノが出てきたと思った。少し見た目の悪い葉っぱと一緒に焼かれた豚肉。野生な感じがした(笑) 味はそこそこでした。

午後は、少し買い物の時間があったり、村に帰って、川へお風呂にいったり、外で遊んだり、昼寝をしたり、自由にたのしみました。

田中 香奈

9/10

地元の小学生と交流をしました！本当は予定になかったけど、急遽日程に入れてもらいました。私的には、そんなアポなしで小学校に外人が行って大丈夫なのか？、私達すごく不審者なんじゃない？、と不安に思いながらの訪問・・・ 案の定、行ったときは授業中。でも、子供たちも自由で、訪問したら何人かが私たちのほうへ寄ってきてくれました。「授業中だから、子供たちに遊び道具をあげないで！休み時間まで待とう」と言われて、目の前に小学生がいるのに遊んでいいのか、小学生たちもある一定以上は寄ってこないし・・・という気まずい授業の時間(笑) 仲良くなれるのか心配しながら授業が終わるのを待ちました。いつの間にか授業も終わり、校庭には沢山の小学生が遊びにきてくれました！やっぱりキヤラ濃くはしゃぎまくりの男性陣が筆頭に小学生に絡みにいってくれたおかげで、小学生たちも寄ってきてくれるようになりました。ちなみに、男性陣は順番に小学生を変な動きをしながら追いかけるという、女性陣にとっては至難の技を使って遊んでいました(笑) 私も小学生と遊びたいけど、あれは無理だ一って思って見ていたんですが、いつの間にか私も小学生に囲まれてました！囲まれ方もふつうじゃなくて、もう沢山の小学生が私の服や腕をひつつかんでひっぱって痛いなのなんの！一度逃げてみたら、今度はその全員が追いかけてきました。もう、それからは鬼ばかりの鬼ごっここの始まりです(笑) 私を捕まえては、教室

の椅子に連行して座らせて、みんなはちょっと離れて、私が逃げるのではというスリルを味わっているっていう・・・私も逃げるしかありません！！もう、すごく疲れました（笑）私が逃げているころ、いっちは小学生たちに囲まれて歌を歌ってもらっていて、一定の時間がきたら小学生2人を抱えて走るっていう遊びをしていて、くたくたでした。ああ、あそこに私同様遊ばれている仲間がいる・・・と横目で見ながら逃げていました。団長は、インドネシア語ができるにも関わらず、囲まれている小学生に「～～！！これが！！格差社会です！！」を復唱させていました。意味も分からず復唱しているのだろうな、私たちと違って団長は小学生で遊んでいる・・・恐るべき団長！！！！

英語も分からない小学生に、自己紹介することさえとても大変でした。でも、言葉なんて通じなくても、とても楽しく遊べました！！初めは、どうやって遊んだらいいのか分からなかったけど、謎の私ができる遊びを考えて？くれるし、小学生は本当に最強だなと思いました。

戸川 笑利

9/11

マカッサルへ帰る日

何もないうでなんだかんだ濃い1日でした。朝7時半朝食。ここに来て生活のリズムが規則正しくなりました。笑そして最後の写真撮影。なんとたまたまジャーナリストの方がトラジャの取材をするために来ていたそうです！ジャーナリストの方々に写真を撮ってもらいました。そして感動のお別れ。そこまで盛り上がりなかったですけど笑



そして移動スタート。今までのトラジャの中で一番静かな移動だったかもしれませんが、大声ではしゃぐのは僕は合わせてやっているような人なので静かで助かりました笑行きしなのバスでも寄ったコーヒー屋さんに寄り、移動。そして最後のマカッサル料理を昼食に。やはり多い。そして残す。ごめんなさい。無理して沢山食べて体調を悪くした体験があるので。。

そしてまた長時間の移動。みんなすっかり眠っていました。そしてホテルに夜到着。そしてホテルに荷物を置いてトラジャコーヒー屋さんへ。みんな軽めのサンドイッチを頼んだのに予想以上の大きさに戸惑っていました。現地で働く日本人もいて驚きました。男の方は男前でした。

夕食後いよいよマルセルさんとバルバラさんとお別れ。何となく僕はこう言う時は団長としてマルセルさんとバルバラさんも楽しんでくれたのか気になりました。ま聞きません

でしたがw二人とも日本来てくれないかな。

とまあこんな感じで終わったーあーシャワー浴びよーと全裸になっていたらユミちゃんに薬が欲しいと言われ、急いで服を着て渡そうとしたところ、沢山の紙飛行機が僕めがけて投げられました。何かと思ったら団長お疲れメッセージでした。びっくりしました。本当に分からなかったのが嬉しかったです。(皆が祝い終わって引き上げる中Iさんが「はいはい。どうぞ全裸になって下さい。」と言われショックでした。全裸で襲ってやろうかと思

いました。) その後日本人メンバーで人狼をやりながらトラジャの思い出について話し合い、有意義に終わりました。皆さんどうもありがとうございます。



二宮 奨

AFTER

9/12

11日でトラジャ Ex. は終わり、今まで行動を共にしてきた16人のメンバーもマルセルさん、バルバラさんとも一緒に行動をすることはないんやな～、なんて思いながら寝た昨日。マカッサルのホテルでこんな風邪菌をまき散らしたのに元気でピンピンしていた同室のあいこちゃんもお別れやな～、なんて思いながら起床しました。あいこちゃんを含む、マレーシアに行く組はフライトが夕方のため、お昼まで寝る予定だと聞いていたので、あいこちゃんとバイバイしたい衝動を抑えてそれはそれは盗人のごとく、洗濯物を片し、下手しい下着泥棒のように部屋を立ち去りました。アフター、バリ組のおかたくさん、こざわ、まなえもん、りさちゃん、こにたんと出発時間が同じくらいのフェイスさんとホテルのロビーでうだうだしているとエリちゃん、さくらちゃんの2人がお見送りに、と起きてきてくれました！なんていい子らなんや(；_；)、あいこちゃんも無理やり起こしてお見送りさせれば良かったな、なんて考えました。そんな素敵な2人に見送られ、見送られるのってなんかいいわ～、見送ってあげたかったな、みんな、なんて考えてタクシーで空港に向かいました。

空港ではもともと体調不良だったまなえもんが、体調不良を極めました。しかしバリに着いたら死ぬほど元気になっていました。まなえもんってわからんわ～、って思いながら嬉しくなりました。滞在先のホテルはとてもきれいで、死ぬほどかわいいポメラニアンもいて、私はデレデレでした。少しホテルでごろごろしてみんなで地球の歩き方にのっているご飯屋さんに行きました。ごはんもおいしくて素敵なお店でした。

ていま



その

後、観光する男子とうだうだする女子とで別れ、各々の時間を過ごし、再び合流しておしゃれなところでご飯を食べて満足げにホテルに戻りました。アフター中、何回も鼻血が出ましたが、素敵なアフターでした。みなさま、ありがとうございます。

早川 友美

9/13

マカッサル空港で自動販売機からおつりが出なかったり、不意打ちの持ち物検査があったりと幾度の難関を乗り越えてやっとクアラルンプール国際空港に到着し、9月13日アフターとして団体の16人中8人でマレーシアに行った。クアラルンプール国際空港から電車で多くの観光地をまわった。はじめにバドゥ洞窟に向かった。駅を降り、少し歩いたところに、緑色の物体が姿を現した。あれは大仏なのか、それともただの観光客の受けを狙ったのかわからないが、自分はなにか居心地の悪いオーラを感じた。またそこから歩くとそこには金色に輝く物体がまたもや出現した。その物体に関しては大仏と断言できるだろう。その大仏の横には天までそびえ立つ270段の階段がある。僕たちはその階段に戦いを申し込んだ。死闘を繰り返した末、戦いに勝利することが出来、頂上に到達することができた。そこは意外に涼しく戦った疲れを癒してくれた。頂上は洞窟になっており、観光客で賑わっていた。その洞窟を歩いていると、一匹の獣と目が合った。そいつは猿だ。これ見よがしにバナナを見せつけてくる。人間に手を出してくるほど結構凶暴でビニール袋を持っていたおばちゃんはその袋を破られ、中身を取られそうになった。洞窟を一周し、270段の階段を下ることに成功し次の目的地に向かうことにした。その前に腹ごしらえだ。マレーシアに来てまで韓国料理に手を出してしまった。ま～いいか。次の目的地はセントラルマーケット。昔からある歴史的なマーケットである。僕はショッピングがそんなに好きではないが、ここでショッピングはとても楽しむことが出来た。しかし、ここにも切り抜かなければならない関門はたくさんあった。それは僕たちが日本人とわかったらすぐに商品を勧めてくる店員である。日本は世界でも裕福な国である認識されており、勧めたら仕方なく買ってくれると思っているようだ。僕たちは日本人とわからないようにサングラスをかけたりとカモフラージュを施したがあえなく見破られ、恰好の餌食にされる。そこで僕たちは無視作戦に入った。話しかけられたらついつい返答してしまう僕はここで重大なことに気付いた。無視こそ最良の自己防衛であると。買い物が終わったらもう7時になっていた。日が沈み、だんだん

暗くなってくる時間帯だ。そこで次の目的地に向かうことにした。最後の目的地、ツインタワーだ。韓国と日本が共同で作ったといわれているツインタワー。その場所に近づくにつれて、わくわくが高まる。到着し、駅を出るとすぐそこにツインタワーがあった。いい感じに日も沈み、ツインタワーがライトアップされた。初めて物を見て感動したと思う。大丈夫、幸いにも涙腺は刺激されずに済んだ。あの美しいツインタワーを見てしまうと東京にあるスカイツリーに何かしら期待を持てない自分がいた。写真を１０枚ぐらい撮ったのち、ツインタワーの下にある ISETAN で夕食を済ませた。もう時間も時間だったのでツインタワーを背にしてホテルに戻ることにした。セントラル駅でもう一日遊ぶグループと４人４人に別れて、僕たちは空港近くのホテルに向かった。翌日、マレーシアからの脱国を試み、無事成功し日本に帰還することが出来た。日本でまず最初にしたこと・・・うどんを食べた。

〈最後に〉

トラジャお疲れ様でした。今回久しぶりの海外でとても緊張していました。英語通じるかなとか病気にならないかなとか結構心配していました。しかし、そんなに英語通じなかったこともなかったし、病気もそんなに重大なものにならなかったし、とても楽しんでトラジャに参加することが出来たと思います。また仲間にも恵まれ一人ひとりとても強い個性があり、よかったと思います。今後いろいろなプログラムに積極的に参加して行きたいと思います！！

市口 尚義

9/14

ウブド→クタ

この日は、いつもより早く目が覚めた。おかたくさんと小澤さんは横のベッドで仲良く眠っていたので起こさないようにシャワーを浴びた。バリ島のシャワーは、きちんと温度設定ができるのでゆっくりとあびることができ、とても満足だった。シャワーを浴び、ホテルで朝食を頂き、たった５０円で洗濯してもらえた洋服や下着を受け取り、クタへと向かった。クタへは、タクシーで移動した。タクシーには、運転手と おかたくさん、小澤さん、りささん、ゆーみんさん、まなえもんさんと自分が乗り、そして大きなトランクもあるということもあり、車内は とても窮屈だった。とくに自分とゆーみんさんは、後ろの荷物置き場に座ることになった。最初は、旅人気分になれる席だ～ と思っていたが、実際に５分ばかり経つとそんな気持ちはどこかに行き、息苦しさで酔いが襲ってきた。そんな自分を気遣ってか、優しい先輩達が音楽をかけて盛り上げようとしてくれた。福山雅治の『虹』を聞いて、とてもさわやかな気持ちになった。

１時間ほどタクシーに揺られてクタに到着した。到着して、車から出る時の解放感はたまらなかった。クタの海は想像以上に透き通っており、クラゲもいなくて綺麗で最高の海であった。だが実際に海に入ってみると、思いのほか波の勢いが強く、あきらかにサーファーの波だった。でもそんなことはお構いなしに、みんなで海に入った。たまに来る大波の時には、

『ビックウェーブ』と言って流されたりして、幼心に戻った様に盛り上がった。また、泳ぎの苦手な自分でもこの日は、泳げる気がした(笑)

海ではしゃぎ終わった後は、海辺のレストランで昼食をとった。Ex.に参加してから、スパイシーなインドネシア料理ばかり食べていたのでバリでの食事は洋食ばかり食べていた。この日も、めちゃくちゃでかいハンバーガーを食べた。ハンバーガーは、日本食ではないが、なぜか懐かしい味がした。

昼食後は、ホテルにチェックインした。まさかの男女が同じ部屋だったりとハプニングに見舞われたが、格安だったし、ホテルも綺麗だったので問題なかった。シャワーを浴び、まったりした後は、町に買い物に行った。クタの街並みは、ウブトと比べるとにぎやかな店が少なく、どこか寂しい感じがした。

夕方頃、海辺でビンタンビールを飲みながら、サンセットを見ることにした。海辺に着いた頃には、お昼の時より たくさんの人が集まっていた。また海もお昼より穏やかで、お昼とはまったく違った雰囲気を醸し出していた。時間が経つにつれ、オレンジ色の空が紫色へと変化していくのは、新鮮な光景であり、自然の力を見せつけられたきがした。そして紫色の空をバックにみんなでたくさん写真撮った。これぞ『The 青春』という写真がたくさん撮れて大満足だった。またサンセッ



トを見ながら飲むビンタンビールは、格別においしかった(20歳なので合法的な飲酒です) サンセットを見終わった後は、夕食を食べに行った。バリに来て以来、極力インドネシア料理を避けてきたが、最後はインドネシア料理で終わりたいと思い、ナシゴレンを頼んだ。久しぶりに食べたナシゴレンは、どこか懐かしい感じがした。

夕食後は、次の日が朝7時のフライトということもあり早めの就寝であった。日本に帰ったら現実を見なければならぬと考え、もう少しバリ島にいたかった。でも同時に家族や友達にも会いたかった。Ex. 中のたくさんの出来事を思い出し、懐かしみながら就寝した。

こうして長いようで短かったインドネシアの旅が幕をとじていった。

小西 達也

9/15

起床→ホテルから空港へ移動→飛行機→帰国

最終日の朝がやってきた。今日はトラジャ Ex. のメンバーが全員帰国を果たす日である。し

かし、スケジュール的にはただ飛行機に乗って帰るだけの1日である。しかし、そんな日も私にとってはただの1日では無かった。「絶対に高級ブランドの財布を買う！」この気持ちに私は揺り動かされていた。日本に居るときに私は財布のファスナーを壊していた。そのとき、私の中にある考えが浮かんだ。「物価の安い東南アジアで高級ブランドの財布を買おう」。私の「トラジャ Ex. でやりたいこと」が1つ増えた瞬間であった。今日はその目標を達成する最後のチャンスだった。ホテルのレストランのお決まり朝食コースのトーストとスイカを食べながら、私は空港のディスカウントショップのリストを調べていた。もし、空港に高級ブランドのショップがなければ、最後まで一緒に旅をしていた甲南大学1回生の有賀くんと、ショッピングモールに駆け込むつもりだった。しかし、空港にCOACHのお店があったので、呑気にホテルのロビーでトランプに興じ、それから空港に向かった。モノレールと電車で1時間ほどだった。ここでも多くの日本人と遭遇した。「やはりマレーシアは日本人が多いな」そんなことを考えながら、搭乗まで余裕を持って、空港に到着するとまずは昼食で腹ごしらえ。マレーシア最後の料理は中華風のドリアだった。しかし、その食事の間も早くCOACHの直営店を探したい。そんな衝動と戦っていた。昼食を終えると僕は有賀くんと九州支部からの参加者2人を連れまわし、必死に探した。空港のインフォメーションで「Where is COACH?」と尋ねるとゲートの奥だといわれた。私は有賀くんを連れて持ち金の日本円を全てリングットに変え、搭乗ゲートをくぐった。しかし、どこにも見当たらない。そこで、改めて空港の地図を見てみると、COACHがあるのはサテライトビルであった。私の中から希望が消えた瞬間だった。それでも、何かいい財布が無いか探し回った。しかし、目を引くものはなかった。そのとき、私は便意をもよおし、トイレに駆け込んだ。用を足してフロアに出ると、正面のショップにブランドの看板が並んでいた。そこを覗いてみると、PRADA、GUCCIなどの高級ブランドのサングラスが並んでいた。サングラス好きの私はそこにわずかな希望を見た。「財布が変えないかわりにせめて高級ブランドのサングラスを買って帰ろう」そう思って私はサングラスを選び始めた。そのとき、私のもとに有賀くんがやってきた。彼は私の目の前にやってくると唐突にこう言い放った。「矢頭さん、時間です。」私はすべての希望を失った。その後、私はクアラルンプールから関空へ向かう6時間のフライトの間、ずっとショックに浸っていた。関空には夜の11時くらいに到着。もうすでに終電は無くなっていた。帰国後、初の食事はすき家だった。僕は持ち金をすべてリングットに変えていたため、有賀くんに払ってもらった。そんなこんなで海外最終日となった9月15日は終わった。

矢頭 祐典



持ちもの

パスポート		水着
海外保険		日本料理のレシピ
航空券		日本の調味料
参加費、ビザ代、遊び代		
シャンプー		
洗顔、ボディーソープ		
洗濯ひも		
ハンガー		
洗濯洗剤		
虫除けスプレー		
手ピカジェル		
日焼け止め		
化粧品		
ビニール袋		
常備薬		
着替え		
暖をとるもの		
マスク		
帽子		
下着		

改善点

- ・ あちらで日本料理をふるまうことを共有できていなかったこと

- ・ 文化紹介の内容が薄かったこと

（向こうの大学の生徒さんたちが行う文化紹介はかなりきっちりしていたのに対し、私たちは AKB のダンスだけ。少し申し訳なくなりました。）

- ・ もっと事前にプログラムの予定を詳しく知ることができたら、より良いプログラムを作って行けると思った。

- ・ 出されるご飯が多すぎて、大量に残飯が出るのがもったいなかった。（金銭的にも）

- ・ 弱冠期間が短く感じた。もう少し日程を延ばして、ゆったりとプログラムをこなすことで、トラジャ村でのゆったりした時間の流れを感じることもできると思うし、体力的にも楽だと思う。

- ・ 村の人と仲良くなるため、一日があつたが村の人がいなかった。

- ・ ホームステイと聞いていたが、トンコナンに参加者だけが泊る形であつたので、施設に泊まっているようだった。

- ・ 食事の量がとても多かった。減らして、参加費を安くしてほしい。

インドネシア語をしっかりと学んだうえで Ex. に挑むべきだと思った。今回は団長がインドネシア語を話すことが出来、トラジャのサダン村の人たちとコミュニケーションを富むことが出来たが、もし団長のようなインドネシア語を話すことが出来る人がいなかったら、とても致命的であつたとおもう。

- ・ 飛行機の便の情報などをある程度教えてほしい

もうちょいお葬式を見る時間は長いほうがよかった

（日程的にしょうがないかもだけど）

- ・ この Ex. 自体 4 回めで歴代の参加者がトラジャでいろんな日本文化をトラジャの村に残していった。ソーラン節など。前回なんの文化紹介を行ったなどの情報を引き継ぎ、いざげんちでもできるように準備しておく。

- ・ フリーな時間が少なかったためか、参加者同士や村のひとと自由に交流しがたかった

- ・ 移動時間ねるだけではもったいない！

- ・ トラジャ村ではホームステイと事前に聞いていたが、トンコナンを用いた宿泊施設とあった感じで、村人もほとんどおらず、わざわざ異国に来てお泊り会をしているように感じた。また、それに伴い、食事も日本人メンバーのみで、みんなでとる、という形だったことを残念に思った。

- ・ 改善すべきというかハサヌディン大学の学生との交流をもう少し増やしてほしい。二日間ではまだ物足りない気がした。またトラジャにおいても村の子供達との交流が少ない上に言葉通じないためこちらから関わろうとしても限界があるように感じた

ので村の子供たちを呼んで何か企画として出したほうがより深い交流ができると思う。私勝手な解釈ではあるがやはり Ex. では人との出会いを大切にすべきなのでもう少しその点を考慮してみるのがいいのではないかなと思う。現地の人と関わる機会が多いので仲良くなるためにも文化紹介からだけでなく日本の物を各々持っていくほうがいいと思う。

- ・ 村人との交流があまりできなかった
- ・ 村の子供は昼間はほとんど村にいないからあまり話せなかった
- ・ ネームタグなどがなかったので、ガイドさんや現地の大学生など、日本人の名前を覚えるのに時間がかかったり、声をかけにくそうな場面があったので、用意してもらうか、なければ用意していく。
- ・ もっと村のお人と交流できるようにしたらいいとおもう
- ・ 葬式について持っと考えたい
- ・ 予定がコロコロ変わる
- ・ もっと葬式の後感想等を聞く機会を設けるべきだった
- ・ 体調管理
- ・ 今回はマルセルさんとバルバラさんの2人のツアーガイドがメインでお世話をしてくれたが、バスの運転手やアンセルさんという男性も水の運搬など影で Ex を支えてくれた。ガイドの方はもちろんのこと、それ以外のお世話になる方ともしっかりとコミュニケーションをとるべきだと思った。特にアンセルさんに関しては最終日まで名前すら覚えられていない有様だった。これはいけないと思った。
- ・ ご飯の量が多すぎて必ず残ってしまう
- ・ ご飯を残すのがもったいないと感じ無理やり食べて体調を崩す人がいる
- ・ インドネシア人ともっと深く交流がしたかったです
- ・ 大学生との交流日を増やす、サダン村でホームステイなど

フリーエッセイ集

トラジャ Ex. で初海外！！

有賀 大輔

僕は、このトラジャ Ex. が海外初体験でした。初めは、一回生だから参加するのは気が引けるな～と思っていましたが、最後には「本当に参加して良かった。本当に楽しかったわ～」と思いました。

自分で飛行機のチケットを取ったり、自分でホテルを予約したり、アフターの行く場所を決めたり、パスポートをとったりしたりほとんど自分たちでやったり決めたりしたので凄くためになりました。

まずマカッサルでハサヌディン大学の学生と交流しました。日本語学科の学生だったのでみんな日本語がとてもうまくて驚きました！！しかもとてもフレンドリーでとても気が合いました。2日間でしたが、別れるのがとても悲しかったです。そして、次にバスで長時間かけてトラジャに行きました。バスでは、みんな疲れていたのかほとんど爆睡していました。そして、トラジャに着いて、初めてトンコナンを見ました。思ったよりも大きくて思っていたよりもきれいでした。しかもトイレが水洗トイレでした。案外近代的でした(笑)そして、水牛市場を見に行きました。水牛市場は、生きている豚が縄で括られて並べられている姿をみたり、水牛が売り買いされている所を見ました。あの豚の鳴き声は、少しトラウマです。日本では、豚を殺す所を直接見たりする機会がほとんどないので、豚肉を何も思わずに食べていますがこういう光景を見ると、命を頂いているのだなと再確認させられました。次にお葬式にいき、全く文化が違うのだなと思いました。トラジャの人たちは、死ぬために生きていて、お葬式は盛大に華やかにやる感じでした。これは、日本人とは全く違う考えだなと思いました。けど、育つ国、場所の違いでこんなにも考え方が違うものかと考えさせられました。

トラジャで楽しかったのは、最後のお別れパーティーで食べたり、踊ったり、歌ったり、話したり本当に楽しかったです。日本では、おそらくこんなに騒いだりみんなで円になって歌ったりはおそらく周りの目を気にしてできないと思います。けど、本当に本当に楽しかったです。いろいろな刺激を受けたので、いろいろ挑戦していきたいです。このトラジャ Ex. に参加できて本当に良かったです。ありがとうございました。

インドネシア・トラジャ Ex.を終えて

小西 達也

『夏休みに何か新しいことにチャレンジしたいな』と思い、参加を希望したインドネシア・トラジャ Ex.。最初の予備登録は、フォームを送るだけですぐに参加表明をすることができたものの、次の本登録でもあるアプリケにはとても悩まされました。自分が Ex. 内でどんな役回りをできるか？など考えたこともなく、自己分析するのにとても時間がかかりました。明確な考えを書くこともできず、今回の Ex. は諦めようと思ったのも事実でした。でも何回も自己分析をしているうちに、自分の新たな一面を見つける良い機会にもなったなと思います。

そして9月4日から始まった Ex.。マカッサルの空港に到着して、ホテルまでバスに乗っている間に、車がビュンビュン走る道路を平気で渡る人々を見て驚いたのを今でも覚えています。

次の日から2日間にわたって行われたハサヌディン大学の生徒との交流。初日には、お互いの文化紹介をしたり、学校案内をしてもらったりしました。自分は、文化紹介係ということもあり、前もって予定を組んでいたものの、ハプニングに見廻られてグタグタになってしまいました。改めて企画を立てるのは難しいなと思ったし、自分の詰めの甘さにも気づかされました。でも何人かの先輩が『良かったよ』と言ってくれたり、ハサヌディン大学の生徒のたくさんの笑顔が見れたので、文化紹介係をしてよかったなと思いました。

そしてハサヌディン大学の子達と別れなければならなかった2日目は、今まで感じたことのないほど別れるのが辛かったです。2日間というこんな短い間でこんなにも情がわくとは思いませんでした。また1日目からずっと一緒に行動してきたナッシーとは、背丈も変わらず、兄弟の様に仲良くしていたので 特に辛かったです。初日の2日間で、人との出会いというものは、大切にしていかなければならないんだと改めて思い知らされた気がしました。

そして大半を過ごしたトラジャ村での生活は、川で洗濯や水浴びと、今まで経験したことのないものだらけでした。またメインであるお葬式は、新鮮そのものでした。日本の『死』に対する暗い概念とは違って、『死』を肯定的に受け入れる考え方もあるのかと考えさせられたし、逆に自分も『死』を肯定的に受け入れれば、また違った生き方になるのかなと思えました。中学校から時々考える『死』への恐怖が少しはなくなった気がします。日本にいれば、絶対に考えることのできなかつた視点を持つことができ少しは自分も成長できたのかなと思います。

今回の Ex. では、現地の人々の温かさは、もちろん Ex. メンバーからの刺激もたくさん受けた気がします。冷静に物事を見れる人や、インドネシア語なんかまったく知らないのに積極的に話しかけていく人、気遣いが人一倍できる人、周りから常に信頼されてい

る人…とあげきれないほど、自分にはないものを持っている人々と参加できたことを大変うれしく思います。自分もこんな人達の様になれるように、どんどん新たなことにチャレンジしていきたいと思います。ちなみにこの気持ちを忘れない様に、机の上にトラジャでの集合写真を置くことにしました(笑)

最初は、行こうか迷っていた Ex. だったけれども、たくさん成長することができたので、本当に参加して良かったと思います。

拝啓 トラジャ Ex. メンバーのみなさんへ！

長野 さくら

トラジャ Ex. おつかれさまでした！

みなさんと一緒にすごせて楽しい思い出が作れて良かったです！

初 Ex. で初プログラム参加で、多分無理やな途中で死ぬな、と最初はとても不安でしたが、飛行機に乗り、バスにゆられ、ナシゴレンを食べていたら、あっという間に月日は流れ、とても充実したキラキラ2週間でした！

今まで海外のプログラムに参加したことがなくて、海外の学生とここまで仲良く交流したことはなかったし、今回のすべての経験が初めてで新鮮でした。メンバーのみなさんとは、関空やクアラルンの空港で会うまで、line や Skype でしか話したことがなくて、ノリや話が合うかどうかとても心配でした。矢頭さんに至っては、悪いイメージしかなかったです。笑

最初はあまり話せなかったけど、だんだん話せるようになって、またアフターなどでもっともっと仲良くなれて、ほんとにいい人たちとめぐりあえて良かったです。矢頭さんも普通の優しいおもしろい先輩で良かったです。

みなさんと話して、他の Ex. の話とかを聞いて、他支部や別のプログラムにも参加してみたいと思いました。何より、ここで仲良くなれたみなさんと、他のプログラムで会う機会があれば、またたくさん話したいです。

たくさん写真撮って、ナシゴレン食べて、恋ばなして、バナナ食べて、トイレの水くんで、人狼して、豚の解体見て、豚肉食べて、体調壊して…ほんとうにすばらしい経験でした！すてきな思い出をありがとうございました！

学びの8日間

中村 安依子

海外経験は多いほうではない上に東南アジアという初めていく場所に不安はあったが非常に楽しみでもあった。異文化に触れるたびに思うのは新しい物事に触れるという

ことは私の世界観や価値観というものを押し広げてくれるものであるということである。私は元来日本のことは好きであるが日本のせかせかした空気感というか雰囲気はどうも苦手で海外に行くたび日本という小さな世界に満足しようとする自分を変えたいと思う衝動に駆られる。そのため変わろうと働きかける刺激をくれる異文化交流に前から関心があった。

人との出会いの大切さを教えられたのはやはりハサヌディン大学の学生との交流であった。たった二日間という短い期間の中で出会って交流するというのはハードな上にあっけなく終わってしまう。普段の私は自分から積極的に交流しようとしながこのような場になると自然と体が動き非常に仲良くなるケースが多いように感じる。いつもと違う自分を感じれるということは非常に面白いと思った。またハサヌディン大学の学生の学習意欲を見ると私も含めた日本の学生は彼らよりも恵まれた環境にいながその有難みや幸福感というものを忘れ勉強や仕事をおろそかにしていると感じた。また日本文学科に行ったとき教材や職員室を見せてもらったが現在利用している教材は全て寄付されたものであるので十分な量・質のものが揃っていないということも目の当たりにし、考えさせられることが多かった。彼ら学生の様子を見ていて宗教とは彼らの生活の一部であり特別な目線で見られたりしている様子はなく自分は自分という感覚を持っていると感じた。

トラジャにおいては印象としては思ったより現代的なものがあり発展しているように感じた。というのもサッカーの話題がわかったり、Facebook、Lineなどをやっている人も多く私が想像していた過酷さはなかった。それでもやはり日本と文化は大いに異なっていた。サダン村においてはトンコナン、川での水浴びや洗濯、牛の水浴び、お墓などを見た。とりわけ衝撃的だったのはお葬式の参列の際豚を生きたまま殺していた場面である。殺される時の豚の鳴き声やその後の処理などはグロテスクなものであったので思わず目を逸らしてしまったぐらいであった。

この夏はこのEx.で締めくくれてよかったと感じている。考えさせられることが多くとても有意義な時間を過ごすことができ、素晴らしい仲間に出会い今後の私の将来像に少しぴんとを合わせられたように思う。

今回のEx.に参加してよかったと思うこと

市口 尚義

今回のEx.に参加してよかったと思うことは、日本を内側からではなく、外側から観察することが出来たことだと思います。日本人は日本がとても裕福であるとわかっていてもなんかピンとこないとおもいます。僕が行ったマレーシア、インドネシアにおいてもマレーシアにおいては日本人とわかればまず声をかけてちょっと高めの値段で物売りつける。インドネシアではむこうの大学生と交流したときに、日本いいなあ〜とか、

日本行きたいなあ〜でもお金がないとかいろいろなことを聞きました。こういう会話を
していくと自分がとても恵まれていることに気が付きました。だからと言って世界に対
して自分はどうすることもできません。今回で改めて自分がどのような国に住んでいて、
どんな些細なことで喧嘩して、どれだけ平和な暮らしをしているのかを再認識できたら
いいなと思います。なんかくどくてすいません(笑)

超人

伊藤 有希

「ああ一面倒くさー」と、言うのは私の口癖で、現にこのフリーエッセイを書くま
でにも何度もつぶやいた。さっさと終わらせてしまえば楽なものをギリギリまで置い
ておき、迫りくる「メ切」に追い詰められてようやく動き出すというのがいつものパ
ターンである。課題にしろ、テスト勉強にしろ、期限を過ぎたことこそないものの毎
度冷や汗をかきながら崖っぷちでこなしている。わかっちゃいる。遅かれ早かれやら
ねばならんに相違ない。ただ、やっぱり動くのには労力がいるし、どうにもこうにも
「ああ一面倒くさー」いわけである。

そんな自分がトラジャではあまり「面倒くさい」という感情を抱かなかった。朝起
きるとすぐに布団から出られたし(ニワトリのおかげでもある)、その後の着替え、ト
イレ、歯磨きも、いつもなら考えられないスピードで終わらせることができた。さら
にすごいのは、階段の上り下りを要するトイレの水汲みをする労力でさえ、ちっとも
いとわなかったことである。普段なら誰かがやってくれるまで待つという姑息な手を
遣ったことだろう。

なぜか。自分でもわからない。知らぬ間にインドネシアのパワーを頂戴していたの
かもしれないし、その時だけ別人になっていたのかもしれない。とにかく、なんでも
のんびりなインドネシアに来たのにもかかわらず私は覚醒していたのだ。

そして、覚醒していると気付くことがあった。マルセルさんとバルバラさん、あの
二人は私以上に覚醒している。朝5時に目覚めてそれ以上眠れなくなった時、下に行
くと二人とももう外でコーヒーを飲んで談笑していた。夜中にトイレの水を汲みに行
った時、バルバラさんがどこからともなく現れ、嫌な顔一つせず手伝ってくれた。バ
スで皆が寝静まり、たまたま私が目を覚ました時、二人はこの後の動きを確認してい
た。…すごい。超人ですか、お二人は。どれだけ強いのですか。

二人に加えてバスの運転手モネさん、彼もなかなか超人である。あんなに狭い道
をよくぞ何時間も運転できたものだ。反対側からくる車にサイドミラーを壊されよう
とも、トラックにこすれて窓が傷つこうともあの穏やかな横顔は崩れることがなかつ
た。あっぱれ。

今三人のことを書いていると思い出した。そういえばマカッサルにも超人がいた。

要塞を案内してくれたニラである。彼女は終始笑顔で私たちの前を行き、元気に導いた。その日は一日を通して歩く時間が長く、おまけに暑かったため、日頃運動をしない私はまあまあ疲れていて、それが顔にも出てしまっていたのだろう。「大丈夫？」と何度も振り返り心配してくれた。夕陽も見終わり、ホテルまでの帰り道。速く座りたい一心で狭い道路を行く。その時も前を歩いていたのはニラだった。ふと目についた彼女の背中。「ニラ重いやろ、持ったるわー」と何気なく手にしたリュックの、重いこと重いこと。びっくりした。華奢な彼女がこんなにも重い荷物をしょって案内してくれていたなんて。少しでも疲れた顔をしてしまったのが本当に申し訳なく、涙が出そうになった。

…何だか話がまとまらない。始めは面倒くさがり云々の話だったのだが。何が言いたかったのかももう自分でもさっぱりだけれど、書き終わってみて思うのはいつか私も超人になりたいということ。強くて優しい超人になりたいなあ。らしくもなく思う。

トラジャで見た豚

田中 香奈

今回のトラジャ Ex. に参加して、思い返して私の記憶に大きいのが「豚」。黒い豚。トラジャに来てから、豚をたくさん見た。

まず初めて豚を見たのは、トラジャに来た次の日 Day4 の朝に行った市場でのこと。豚の売られている市場に行った。何匹もの大量の豚が竹とひもで縛られていて、横にねかされた状態で、並べられていた。衝撃的だった。彼らは自分の状況を理解しているのだろうか。縛られた状態で運ばれてゆく豚は、ギャーギャーわめいていた。市場周辺を歩いているときに、バイクが走り抜けていった。そのバイクを思わず二度見。バイクの後ろには彼らが乗っていた。そう、竹とひもで縛られ固定されていた、さきほどの豚。日本ではまず見ない光景に、思わず目が奪われた。

次に見たのは、Day6 のお葬式でのこと。生け贄として捧げられるため、運ばれ、縛られて寝転がされていた。そのうちの一匹は解放されたかと思うと、しばらくして殺された。解放されたあと、自由の身となった彼はのんきに葬儀場を歩いていた。そんな風に見えた。そのすぐあとに剣で刺されて、鳴き叫び息絶えた。そんなに簡単に、というかすぐに、息絶えてしまうものなのだなと思った。その後、丸焼きにされ、解体されていた。皮や身をザクザクとナイフで切っていたり、胃や腸を腹の中から、素手で取りだしているのをみた。その様子に、怖い、気持ち悪いと思ってしまった自分がいたが、不思議と長々見てしまったし、写真も撮ってしまった。

そして、一番記憶に残っている豚のことといえば、サダン村でのホームステイ最終日の Day7 で食べた豚。さよならパーティーで食べる肉として用意された。生きている

ところから解体までをすごく近くで見て、実際に食べて、トラジャに来てから一番豚を近く感じた。村長が豚に剣で一撃を刺すと、豚がお葬式には聞かなかったほどの大きな叫び声をあげ、思わず口や耳をふさいだ。叫び声は長く続いて、それは何とも言えない悲鳴で、村長が剣を抜くと、血がドボドボでてきた。悲鳴が小さくなっていき、ついにやむと、やはり臓器が取り出されて丸焼きにされた。そして解体され、肉じゃがをつくるとき、料理場にあらわれたが、その時の豚は、スーパーで普段目にするような、大きなあの生きていた豚とは頭に浮かんでこないような状態だった。私の中で、「生き物」が「食べ物」になった瞬間だ。パーティーのご飯に、私たちの肉じゃがと、用意していただいた串刺しの豚肉が並んだ。あの一連の流れをみたのに、食べるときになると、おいしいおいしいしか思わない自分がいた。本当においしかった。

トラジャに行って、生き物たちと一緒に生きているのだということ、命を食べて生きているのだということを感じた。最高の景色の山を見て、食としての水牛や豚をとらえ、人のさまざまな表情を見て、川でお風呂や洗濯をして、自然をすごく近くに感じることができた。

やっぱり優男

戸川 笑利

一番記憶に残っているのはやっぱり、マカッサルの大学生との交流です！本当に楽しかったです。みんな日本が大好きで、特に男性陣のアニメや特写やボーカロイドの人気さにびっくりです！私的にはキタコレです（笑）にわかでも知っていてよかった～と思いました。アニメ（がっつり深夜アニメ）は何が好きだとか、仮面ライダーはこれが好きだとか、ボカロのこれが踊れるから踊ってあげるねとか！！本当に海外にも日本の文化はこんなに広がっているのだなと思いました。女の子とは、恋バナを沢山しました。イスラム教の人は、キスでさえ結婚しないとしてはいけないらしいこともあり、結婚したいって彼氏に毎日のように言われるそうです！！うらやましい（笑）そして、マカッサルの大学生の男性陣、本当にみんなとても優しいです！例えば、食堂で席を探していたら席でたばこを吸っているだけの男性陣がいたのですが、なんと席を変わってくれました。私的に、たばこを吸っているちょっと怖めの人かと思っていたので、本当にびっくりしました（笑）こんな感じでたぶん多くの男性陣は優しいのですが、彼氏となると本当にびっくりするくらい優しいのです。私が見たのは、彼女がちょっと遠くで日本語が分からず困っているのを見かけたら、すぐ辞書を使って調べて教えにっていました。見ていて微笑ましかったです。ちなみにマカッサルの大学生の女性陣に好きなタイプや彼氏の好きなところを聞いたところ、だいたい優しい人との返答が！！なるほど、だからマカッサルの男は優しいのか・・・と思いました。

みんな日本語上手だから、濃いところまでの話ができました。本当に話すって楽しいなと思いました。

ご用心

矢頭 祐典

トラジャ Ex. のアフターはクアラルンプールに行った。私はいつも使っている小さめのショルダーバッグを忘れていたため、トラジャでは充電器等々が入った重いサブバッグを持ち歩かざるを得なかった。そこで、クアラルンプール観光を身軽に楽しむために、早めに代わりのショルダーバッグを買おうと思った。クアラルンプールのチャイナタウンの近くにあるセントラルマーケットの近くの通りにいかにも安そうなショルダーバッグが並んでいた。

私はせっかくなので、ここでバッグを買おうと決意した。並べてあるバッグを1つ手に取ってみた。値札などは貼っていない。そこで、店のファンキーなお兄さんに「How much?」と聞くと、「とりあえず、肩にかけてみろ」と言ってきた。言われるままに肩にかけてみる。そこで、改めて値段を聞くと70 リンギットと言われた。日本円で約2500円である。しかもそのバッグには「PRADA」といたるところに書かれている。明らかに偽物である。そこで、値切りをすることにした。こちらが40 リンギットを提示すると、「45 リンギットだ」と言ってきた。もうこれ以上駆け引きするのは面倒くさかったので、45 リンギットでそのバッグを買うことにした。日本円で約1500円である。ところがそのお兄さんはそれに気を良くしたのか、ヴィトンの財布を我々の一団にすすめてきた。お兄さんは日本語を覚えたのであろう。「ヤシュイ」と言いながらその財布を差し伸べてくる。それで誰も買おうとしなかったのも、今度その財布の革を炙って、数人の鼻に押し当てた。どうやら燃えないことをアピールしたかったらしい。そのようなお兄さんの努力むなしく私以外にその露店で買い物をした者はいなかった。誰も買わないとわかるとそのお兄さんは財布を乱雑に箱の中に投げ入れた。誰から見ても明らかに偽物だった。次の日にPRADAの直営店に行ったが、店員さんは手袋をしており、ドアボーイまで居るなどとても学生が入れる場所では無かった。その偽物だらけの露店と直営店の雰囲気ギャップに驚いたものである。私はそのバッグを買って以降、「ヤズ、PRADAを買う」などとネタにされ、最悪の場合、入国審査に引っかかるのではないかという不安に襲われるなど散々であった。

皆さんもぜひ海外に行かれる際は偽物には気を付けていただきたい。また押し売りされても断る勇気を持っていただきたい。私は自らの体験をもって心からそう感じている。

トラジャ Ex. に参加して

渡辺 宗太

私はこのトラジャ Ex. に参加して様々なことを体験した。バスが車とぶつかっても平気でそのまま運転していたり、トイレに流すときはシャワーのようなものを用いて

流すといった、日本では決して体験できないことで今後なにかしらに使えたらと思う。葬式が日本と違ってお祭りのようなもので、日本では亡くなった次の日あたりに葬式をするが、トラジャでは4年ほど親族がお金をためて盛大に行われる。その際に水牛を何頭か殺されるのだが、それは亡くなった人の魂が水牛に乗って早くに天国にいけるようにと込められているようだ。私はこれを聞いて水牛が可哀そうだと思ったが、現地の人からしてみればそれまで大事に育てられてきたのだから、水牛も幸せだという考え方があるので可哀そうだと思わないらしい。その価値観の違いをまざまざと見せつけられた。インドネシアは多宗教国家なので、女性が髪の毛を見せないようにスカーフのようなものを巻いている人や巻いていない人がごっちゃになっているのにも関わらず、何の疑問ももたないのだろうかと思う場面もあった。一方インドネシアでもみんながスマートフォンを持っていたり Facebook を活用していたりと、日本と変わらない部分もみられて、世界はひとつなんだと再認識した。

国際交流？異文化体験？

小川 理紗

小さい頃から、英語が好きだった。それに、「外国っぽいもの」（特に西洋っぽいもの）に憧れていた。「外国っぽいもの」の中で私が一番惹かれていたのが洋画だった。映画の中の外国の風景は隙がなくキレイで、登場人物は一様にかっこよかった。

次に私が惹かれた「外国っぽいもの」は発展途上国の貧困問題だった。小学校高学年くらいの頃に「世界がもし100人の村だったら」という本が流行り、この本に基づいてドキュメンタリー番組が放映されたりしていた。その映像を見て、私は衝撃を受けた。日本はこんなに豊かで、私は毎日嫌々ながらも学校に通っているのに、学校に通えずに親の仕事を手伝わないといけない子どもがいるなんて…！と幼心にそんな子どもたちを助けたいと思っていた。（そしてそんな自分に酔っていた。）

そんな子どもだったのも、初めて海外に行ったときは見るものすべてが新鮮で、英語しか伝わらない環境がすごく楽しかった。ここに住みたい！と思ったほどであった。大学生になってから、フィリピン、インド、フランスに行った。I. S. A. という国際交流を目的とする団体に入り、どんどん海外に出ようとする日本人や、たくさんの外国人と出会った。外国に行くことは真新しいものや人に出会えて、確かに楽しい。それに外国での体験は私を成長させてくれる。ただ漠然とそう思っていた。

そんな新鮮さや野心に飽きてしまったとき、わたしにとっては印象的な出来事があった。

ある日本で行われた国際交流イベントでのことである。そのイベントには日本人とさまざまな国籍の外国人が半分半分くらいで参加していたのだが、グループ分けしたときに私のグループは日本人4人、外国人2人になってしまった。その同じグループの一人の

日本人が「このグループ、日本人多いですね。ハズレだ」と言っていた。

この言葉に違和感を感じてしまった。確かにわたしも日本人メンバーが多いことに少し残念な気はしたし、きっとこのイベントの少し前の時期であつたら何も違和感を感じなかったと思う。この違和感のもとには、国際交流に対する猜疑心であつたように思う。

そんなに「外国人」と話すこと、外国に行くことが大事なのか、「グローバルスタンダード」とやらにあわせないといけないのか、留学に行つて成長できた、と言う人はただ日本でやらないといけないことをやっていなかっただけじゃないのか、そんなことをずっと考えていた。

何でこんなにお金を払つてまで海外に行くんだろう、行きたいんだろう、と思いながらもやはり自分のあいまいな海外志向は止められず、ずっと興味のあつたインドネシアトラジャ Ex. に行くことにした。

行つてみて、まず感じたのが「インドネシア、最高！」。(自分、単純すぎる…笑) 食べ物は美味しいし、治安はいいし、「kira kira」(インドネシア語で「大体」という意味)という、大雑把さを肯定してくれるような単語まである。インドでお腹を壊したり、少し怖い経験をしたこともあつて、インドネシアはかなり居心地よく感じた。

そんな中、ハサヌディン大学の学生との交流が行われた。学生たちは日本語を学んでいて、一生懸命日本語で話そうとしてくれる。『国際交流＝英語』という構図しか頭になかつた私にとってこの状況は新鮮なものだつた。

また、トラジャでの経験は、異文化のオンパレードであつた。トンコナンに寝泊りしたり、川で体を洗つたり洗濯をしたり、一週間も続く盛大なお葬式を見学させてもらったり。

今までの私にとっての異文化体験とは、日本とは違う文化に触れてそれに慣れ(もしくは耐え)受け入れようとする事だつた。違いにばかり目を向けて、違いにだけ面白さを見出そうとしていた。そして違いを意識することによって日本人であるという意識を浮かび上がらせて「やっぱり日本が1番」と帰国するたびに思っていた。

けれども、このトラジャ Ex. での異文化体験は、何が違うのか自分でもよくわからないけれど、違いをあまり意識せずにすんなりと受け入れることができた。

このトラジャ Ex. での私にとっての1番の収穫は楽しいものは楽しいんだからそれでいい!と割り切れたことだ。「国際交流」には指標とかゴールがなくて自分が何をやっているのかよくわからなくなる。だからこそ個人の満足度が大切にもなるし悪く言えば自己満足で終わってしまう。

そんな「国際交流」の中での自分の感性の大切さを、このトラジャ Ex. は教えてくれた。

これからもいろいろな場所でたくさんの人に出会い、「国際交流」と「異文化体験」を楽しみたい。

となりのトラジャ

小澤一生

トラジャ。はてしなくとおい世界。飛行機を乗り継ぎ、さらにバスで10時間。フツウなら絶対に行かない。てか、まず知らない。外とは少し離れ、独自の文化がいまも残る。いわゆる、秘境。
そう、おもっていた。

しかし何点かそれを裏切る事件が起きる。

1つ目。文明の発達。

ながらくバスに揺られ、ようやくむらに着いた。そのとき皆の歓声第一号が「トイレあるで！しかも水洗！」だった。旅先でまずお腹を壊す私にとってはたいそう嬉しいニュースであった、がしかしどこか影で寂しくもおもった。

2つ目。宗教。

インドネシアはほとんどがイスラム教である。マカッサルでも女性は頭にベールをかぶっていた。対して、トラジャは自然崇拜。死者は盛大に祀られるという固有の文化がある。けど、バスから眺める景色のなかにはところどころ十字架、十字架。ガイドさんによるとどうやらトラジャ族は今は殆どキリスト教らしい。12月になると、むらのあちこちで赤服をまとったサンタクロースが飛び交うのだろうか。

3つ目。あそび。

何年か前に神々のあそびが流行った。どこか遠い世界にはあるものだと本気で信じていたときもあった。でもトラジャ人はそんな変な遊びはしない。笑 村長(Jr)はとてもサッカーがうまい。有望選手だ。村長とマルセルさんはフリスビーを交わす。バルバラさんはいつもトンコナンの下で、面子のようなドミノというカードゲームをしていた。最後の飲み会でギターを演奏してくれた人。皆そのリズムに合わせて踊り狂う。帽子私丸いと連呼する遊びも教わった。小学校や孤児院を訪問した時も、なにか遊びを求めて僕らに群がってくる。ソーラン節を求められたとき、正直あせった。前回トラジャ参加者が教えたのだろう。

そんなかんじで彼らは遊びに貪欲だった。暇になったらとりあえず遊んでいた。

だれかが言っていた

「生きることは死ぬまでの暇つぶし」

これがトラジャの遊びの風景と死生観がリンクしたような気がした。

近年、トラジャという独自の文化にスポットを当てられ、コアな観光地として世界各地から訪れるひとが増えてきている。僕たちもフランス人ツアー客によく遭遇した。交流人口が増加するなかで文明化やグローバル化が進んでいることは確かだ。しかしそれは

まだ表面的な見方であって、トラジャ族の根底には独自の死生観とともに人間本来のサガも残っている。これからもトラジャにはいろんなひとが入ってくると思うが、やはり見どころが葬式や墓、トンコナンといった現地の日常生活に一步踏み込むかたちの観光となるので、干渉のしすぎはけないと思う。個人的には葬式の会場でバズーカみたいな一眼カメラを掲げてマックブックエアーを開いている外国人はどうかと思った。葬式は僕らからしたら珍しいものでも、彼らからしたら普通なのだ。そこはちゃんと敬意を払うべき。立つ鳥あとを濁さず、みたいな。

それよりか、心をからっぽにしてあそんでいるトラジャのひとはほんとうに楽しそうだ。ぼくもまぜて！

一番前の席でマカッサルを見て

早川 友美

私は Ex. が始まるや、否や、すぐに高熱を出したため、体調が回復してもトラジャ村へ移動する際から、ほぼ Ex. が終了するまで一番バスの揺れの影響を受けにくい一番前の席に座らせてもらった。そこで気づいたことがある。

バスの大きな窓で外を眺め、ぼーっとしていたら、ブー！っとクラクションがしょっちゅう鳴っている。日本でこんなに鳴らしたら交通公害みたいなものやろ、何なら鳴らされたほうはイライラして、鳴らしてる人、刺されるわ！と思うぐらい、いたるところでなっている。また、それと同時に右左折する気なんかない、また右左折なんてできない一直線の道路で異常な回数の方向指示器を出す！よくよくタイミングを見ていると、どうやらクラクションも方向指示器も対向車とすれ違う少し前のタイミングで出している。後続車に追い越しするなよー、と合図しているようだ。クラクションもすれ違う車に注意を促しているようである。日本に帰って、教習所の教官と、この話をしてみた。日本も戦後は町中でクラクションが響き渡っていたらしい。交通ルールなんてあるようでない話で、交差点で曲がるのも、直進車を妨げないように、なんてルールはなく先に交差点に入ったほうが進む権利を持つそう。だから交差点内はしょっちゅう事故、そして自分が先に交差点に入ったという主張のし合い。そんな話を聞いていると、自分の車と対向車の安全性を考えたクラクション、後続車のことを考えた方向指示器は他人思いな交通ルールだな、と感じた。もちろん、近隣住民はクラクションに迷惑しているだろう。しかし、戦後の日本と同じようにクラクションが響き渡っている街が発展していくのかな、と感じた。

（しかし、モネさんが前の車にサイドミラーをぶつけときながらお互いに運転手が出ていくわけでもなく、警察を呼ぶでもなく、車が破損したことを嘆き、笑っているのには驚いたし、日本で免許とってて良かった、！と感じた（笑）

インドネシアのごみ問題

林 愛恵

何を書きましょう、考えました。

思いつきました。

お葬式や死生観や豚の解体などなど…について書く人がきつといるかと思いますが、私は視点をずらしてインドネシアのごみ問題について書きます。

インドネシアは大型ショッピングモールや高層ビルが建ち並ぶ経済発展中の都市、そしてリゾート地がよく日本で放送されるでしょう。どこもゴミひとつなく綺麗な街だと思えます。しかし、実際インドネシアに行ってみると道、川、海など街のいたる所がゴミだらけでした。観光地はさすがにきれいに掃除されていましたし、ゴミ箱が全くないわけではありません。大通りから中へ入ると道はゴミだらけ、道がゴミ箱になっているのです。

私がごみについて気になりはじめたのがハサヌディン大学を見学していたときです。大学内にある屋台で肉団子を買って、食べ終わって肉団子が入っていたビニール袋や串をどこに捨てたら良いかインドネシア人に聞くと「ああ、そこらへんに捨てといて」…びっくりしました。あたりを見回すとごみだらけで、いたる所にごみが集まって小さな山がつくられているのではないですか。道に捨てられたごみをどうするのかを聞くと「その場で燃やすんだよ」と。おお。なるほどその場で燃やすのか、なかなかワイルドだなと思いましたが、環境に悪いですね。

インドネシアのごみ問題について少し調べてみたところ、やはり深刻な問題だそうです。ごみであふれ返っている川で体を洗ったり飲み水に使用したりする地域もあるそうです。非常に不衛生なのにそれでも道にごみを捨て続けるのはなぜだろうかと疑問に思いました。

ごみをゴミ箱に捨てる習慣がない、これが一番に思いつきました。もしかするとそもそもごみ問題について関心がないのかもしれませんが。

近頃、日本の中小企業がごみ問題を解決しようとする動きがあります。ごみ処理施設を拡大し、ごみを分別する、ごみを資源にリサイクルをする仕組みづくりを担い、リサイクルごみを回収するため、もともとごみを集めて売ることによって生計を立てていた人々を雇いごみを回収しているそうです。ごみ問題の解決に取り組みながら雇用を生み出す、まさに一石二鳥の取り組みだと思いました。

ごみをゴミ箱に捨てる、ごみを分別する習慣を多くのインドネシア人が身に付け、いつかごみのない綺麗な街に変化していることを願います。

トラジャ Ex.を通して「死、生」について考えることが多かったですが、日常に焦点をあてることも大事だと思いましてフリーエッセイなので自由に書かせていただきました。

死ぬということ

岡村 拓

トラジャ Ex. で最も印象的だったこと、それは死が非常に身近なこと。死ぬために生きると言われるトラジャの人々は、幼いころから一緒に暮らしている家畜の死を日常的に目の当たりにしている。5歳の子供が笑顔で、時々友だちとじゃれ合いながら、豚が殺されて断末魔を上げるのを見つめている。ぼくらの感覚からすれば、すごく残酷な絵面なんだけど、それはあまりにも表面的で自己中心的な感想だろう。

日本では、もはや日常的に死を意識するのは難しい。肉も魚もスーパーで切り身の常態で売られている。家畜が屠殺される場面など、トラジャへ行くまで一度も見たことがなかった。調理しやすい状態で置かれ、どこの部位かもわからない肉たち。それが、少し前までは牛や豚や鳥の身体の中でうごめいていたことなど想像できない。あまりにも死が日常からかけ離れた出来事であるために、いつの間にか自分たちが生きていることが当たり前になり、結果として生きていることさえも実感がない。

一方、トラジャの村では、家畜と共に生き、日常的にその死を目の当たりにする。そして、さっきまで目の前で生きていた動物を食べる。5歳の若い少年たちもいっさい臆することなく、家畜の死を受け止めていた。こうして、死の存在を自然と五感で受け入れているんだろう。このような環境は決してトラジャに限られたものではないだろうけど、葬式に代表されるように、家畜の屠殺がここまでオープンに、そしてエンターテイメントとして行われるのは極めて異例だと思う。

本来、生死は常に隣り合っているものである。死があるから、生がある。死が人生の最期にある限り、生は死のためにあるべきものなのだろう。そんな風に考えると、葬式を人生最大のイベントと捉え、そのために生きるトラジャの人々の考え方は、非常にシンプルで納得できる。

トラジャの人々の多くは、仕事を求めて村を出る。海外へ出稼ぎに行く人も多いという。太古の昔に海を渡ってスラウェシにたどり着いた彼らは、再び海を渡って、このグローバル時代に漕ぎ出しているのだ。しかし、彼らの心は常にあの舟形の屋根の下にある。必ず彼らは最期には村に戻ってくるという。そして、それまでお金を稼ぐのは親戚・家族の葬式のためなのである。人生の目的が私たちには考えられないほど、はっきりしている。

昔の日本人も、武士道に生きた人々は死を確実に意識していたと思う。特に、武士の家系に生まれれば、もしもの時は潔く死ぬことを教えられる。それはトラジャとは死の

捉え方が違うが、死を意識して生きるという意味では共通していたと思う。そして、死を意識して生きている人はあらゆる人生の転機において、シンプルで明快な答えを出すような気がする。

現代日本は昔より、そしてぼくらが訪れたトラジャの農村よりも、きっと複雑で、生きていくことが実は難しいんじゃないかと思う。だからこそ、死を意識して生きることが大切で、そうすることが小さな悩みを打ち消して、シンプルで明快地に生きていく道しるべになるのかもしれない。なんて、何の根拠もないけど、そう思った。

言語

二宮 奨

僕は過去4年間のトラジャ Ex. 参加者の中で、一番楽しめたのではないかなと言える程、僕にとってこのトラジャ Ex. は充実していました。そこには様々な理由があるのですが、そのうちの一つの理由として、私がインドネシア語でインドネシア人と意思疎通を交わせたことが大きな要因だったのではないかと思います。

過去の参加者から、インドネシア語の本で意思疎通を図ろうとしても無理だった等の意見を聞いていたので、インドネシア語での会話出来ないのかなと思いながら参加しました。しかしいざ参加してみると全員インドネシア語で話が通じました。そしてインドネシア語が出来る外国人ということで、とても親切な対応をしてもらいました。(もともとトラジャ Ex. で出会った人はみんなとてもいい人ばかりだったのですが。) また、インドネシア語が出来なかったらここはもう少しコミュニケーションに手こずってしまったのではないかな、インドネシア語が出来なかったら危なかったのではないかな、というケースもありました。

ここで何が言いたいかというと、もっと言語を勉強して色々な世界を I. S. A. の方には見て欲しいということです。先の例もそうですが、今回のトラジャ Ex. でインドネシア語が出来たことで色々な方と話し、色々なことを聞くことが出来ました。言語が出来ただけで同じ1日でも色々な情報を吸収することが出来ます。英語でもいいですし、世の中にはインドネシア語のように英語等よりも日本人にとって習得しやすい言語はあります。そうした言語を習得して広い世界を見て欲しいと思います。

私見ですが、今後 I. S. A. にもベトナム Ex. エジプト Ex. が増えてきますが、公用語は日本語です。日本語だからこそ参加しやすいというメリットはありますが、プログラムを機に他言語を習得しようと思えるような Ex. になって欲しいなと老害の僕は思っています。

編集後記

報告書編集を終え（実際はこの後、同じく報告書係のいとうーに最後の大手間を任せてしまっているのだが）、とにかく疲れたな、と思う。過去の Ex. で一番楽だと感じた ML 係を経験者の特権や、と狙っていたからだ。しかし、大誤算で報告書係になり、日記をみんなから回収していると、添付されたメールには優しい言葉を載せてくれる人もおり、日記も各々の感じたことを一足先に知れ、楽しく、嬉しく、そしてこのメンバーで Ex. に参加できてよかったな、と感じた。

さて、Ex. はというと 1 回生でも、4 回生でも楽しめる内容であり、自らが Ex. 初日から 3 日ほど熱で寝込み、マカッサルでの生活を楽しめなかったせいもあるがもし 1 回生の時に行っていれば、もう一度 4 回生で参加をしても感じる事、動ける事、楽しみ方が変わり、どちらも素敵な思い出として残るのでは、と感じた。また、年をおうごとに、インドネシアも大きく変わる。そんな様子をもう一度見るのも素敵ではないか、と感じた。

インドネシア・トラジャ Ex. 報告書係り
早川 友美

任務完了。これを書き終えれば Ex. 終了から約 2 週間にしてやっと任務完了です。参加したメンバーの原稿を誰よりも早く見られるこの係りはなかなか楽しいもので、じっくりと読みふけては手を休め、形にするのに随分と時間がかかってしまいました。この報告書をいち早く世に送り出したかったのですが、例年より長く設けられていた提出期限ももう目の前です。ごめんなさい。

集めた原稿を読んでいたら、ついこの間の出来事が遠い昔のことのような気がして切なく、おセンチな気分になりました。トラジャで阿保みたいにギャオギャオ言っていたのはいったい何年前でしょう。今はただ、この気持ちを参加者の誰かに共感してもらいたい一心です。（笑）

さてさて、本当に任務完了のときが近づいてきてしまいました。ここには参加した私たちの触れたこと、感じたことの一辺を記しているので、読者の方がこれを介してトラジャの事を知り、少しでも何か感じていただけたら幸いです。

最後に、トラジャ Ex. に関わってくださったすべての方へ心よりお礼申し上げます。
これからトラジャ Ex. に幸あれ！

インドネシア・トラジャ Ex. 04 報告書係
伊藤 有希

インドネシア・トラジャ Ex.報告書

編集：早川友美、伊藤有希

発行責任者：坂平美和

発行元：日本国際学生協会
